

1496年、ローマに訪れたミケランジェロ・ブオナローティ（1475-1564年）は、現在バルジェッロ美術館に所蔵される《バックス》（1496/7年、以下、本作）を制作した。彼は伝記作家アスカニオ・コンディヴィに、本作を依頼したのは銀行家ヤコポ・ガッリであると語らせたが、M. ハースト（1981）が提示した支払い記録は枢機卿ラファエーレ・リアーリオが本作のパトロンであることを証明した。彼は当時建設中であった新たな宮殿（現在のカンチェッレリア宮殿）の庭のために作品を依頼したとされている。マールテン・ファン・ヘームスケルクの素描が示すように、本作は何らかの理由でリアーリオに受け取りを拒否されガッリの庭に置かれることとなるが、このような特異な事例にもかかわらず、本作がパトロンとの関係という文脈から十分に論じられてきたとは言えない。

本作は古典的な主題を扱いながらも、正面性の否定、不安定なコントラスト、女性的な腹部の丸み、酩酊状態を表す顔付きといった非古典的な要素を持つ作品であり、作家の古代との競合の結果と言われてきた。本発表では、本作と古代についての先行研究を踏まえつつ、これまで看過されてきたパトロンの存在に注目し、ミケランジェロと古代の問題に新たな視点を提示することを目的とする。

発表にあたり、リアーリオを取り巻く人文主義的な環境に着目することは重要である。リアーリオはポンピオ・レトが創設したローマ・アカデミーのメンバーであった。そのアカデミーはキリスト教以前の異教的古代の復興を目指した。その参加者は庭園やブドウ園で、演劇や、宴会を伴う詩のコンテストを開催したが、その環境を作り出すものとして古代彫刻を重宝した。リアーリオもまたそのアカデミーの活動に参加したことが確認されており、C. フロンメル（1999）は彼の新たな宮殿でアカデミーの活動が行われる予定であったことを示した。故にミケランジェロはそれを念頭に置いて本作を制作したと考えられ、本作には古代彫刻と類似する機能が期待されたと推測される。

リアーリオが本作の制作を依頼した背景にはこうしたアカデミーの活動があった。酒と靈感を象徴する自然神バックスはそれに相応しい主題であっただろう。しかし同時にリアーリオの好古趣味にも注目する必要がある。彼は熱心な古物収集家と知られ、ミケランジェロを雇用したきっかけは彼の《眠るクピド》（現存せず）を古代美術として購入したことであった。彼が想定したものは《クピド》のような擬古的な作品であり、先に述べた要素を持つ現代的な作品ではなかっただろう。これはパトロンが本作の受け取りを拒否した理由の一つであると考えられる。

以上より、本作は古代と関連した環境にあったと言える。作家とパトロンの古代に対する考え方の差異を指摘することで、ミケランジェロの独自の古代観を提示したい。